

封と性質を同じくし、必ずしも繼承せしめるを要しなかつた爲であらう。因つて家康は之を利光に與へ、その中三萬石を分かつて夫人の化粧料に當てしめた。利光乃ち九月十六日駿府に至つて家康に謝し、廿三日江戸に行きて秀忠に謁し、左近衛權少將に任じ、十月朔日江戸を發し、十一日金澤に歸城した。この月豊徳二氏覺を生じ、一たび大坂の降伏となり、翌元和元年和又破れて遂に豊臣氏の滅亡を見たが、その兩度の役に利光は大に戦功があつたから、閏六月十九日參議に進められた。三年三月利光江戸に觀し、秀忠は五月十三日公式に藩邸に臨み、六年正月命を受けて大坂城修築の事に當つた。八年七月利光の夫人逝去して天徳院と諡せられた。九年七月徳川家光京師に朝し、征夷大將軍に任ぜられ、利光亦之に従ひ、寛永三年七月家光の再び上落した時、利光は本國寺に館し、八月十九日從三位權中納言に陞り、九月六日天皇の二條城に幸し給うた時之に扈從し奉つた。六年三月利光は江戸に赴き、四月廿三日肥前守と稱し、諱を利常と改め、廿六日家光の臨駕を迎へ、廿九日秀忠の來駕を得た。然るに八年七月秀忠は疾んだので、利常は江戸に至つて之を訪ひ、八月國に就いたが、同月臣屬子弟の強健なる者を選んで小姓とし、十月先の大坂役に勳功あつた者を追賞し、多く船泊を他國より購ひ、且つ今夏災に罹つた金澤城を修築する等、白眼を以て見れば稍疑ふべき行動があつたので、江戸では加賀侯が前將軍の不豫に乗じて不軌を謀らんとすとの流言が行はれた。利常乃ち之を分曉せん爲、十二月十日江戸に入り、横山康玄を登營せしめて漸く疑惑を除

くを得た。之より利常は決して國に就かなかつたが、十一年家光の將に京師に朝せんとするに先だち、四月下旬歸城して暫く政務を視、五月十一日又江戸に至り、七月從行して大津に館し、十八日共に禁闕に赴いて天機を奉伺し、八月大津より直に歸國した。十二年正月利常また江戸に往き、九月二十日家光は利常の三女滿姫を養ひ、十一月之を廣島侯淺野光高及び利治を率ゐて江戸城修築の役を助け、自ら場に臨んで工を督した。十六年六月二十日利常致仕して家を光高に譲り、又利次・利治に分封し、自ら二十萬石を養老封とすることを許され、小松城を菴と定めて大に工を起さしめた。十七年三月廿八日家光鷹を近郊に放ち、歸路本郷邸に臨んだので、利常は兒小姓を踊子としてその舞踏を台覽に供し、盛饌を供へて之を饗した。次いで四月十三日家光の日光參詣に従ひ、廿一日本郷邸に還り、六月七日江戸を發し、廿一日小松城に入つた。然るに正保二年光高卒したるを以て、利常は再び孫綱利(後綱紀)の政を攝したが、萬治元年綱利夫人の入與と、江戸城天守築築造助役との事を終へ、九月廿三日小松に歸り、十月十一日玄猪の祝宴を擧げ、その夜丑刻瀕溢血を發して薨じた。故に忌辰は十二日とせられる。享年六十六。微妙院一峰充乾大居士と諡し、能美郡三宅野に於いて茶毗に附し、遺骨を金澤野田山に葬つた。葬送は、菅君雜錄に十月廿二日と記するが、聊か早きに失するやうに思はれる。

マヘダトシツヨ 前田利幹 大聖寺藩主前田利道の六男。母は保安院。明和八年十一月廿八日江戸に生まれ、初名頼十郎・頼母。享和元年八月廿六日富山藩主前田利謙の養子となり、十月十二日家督相續、十二月十六日從五位下淡路守に叙任し、二年五月廿八日入部、三年十二月十六日從四位下に陞り、文政三年十二月十六日侍從に任じ、天保六年十月十九日致仕、七年七月二十日江戸に於いて卒し、廿六日發喪、享年六十六。婦貞郡長岡に葬り、富山大法寺を菩提所とした。法號は靈昭院建中日雅大居士。後大正四年十一月十日從三位を追贈せらる。

マヘダトシツヨ 前田利豐 加賀藩臣。初諱利貞。通稱乙松丸・七兵衛・備前。前田利家の六男。慶長三年三月十六日伏見に生まる。母は退正院。初め神谷守孝に養はれて神谷氏を冒し、十六年前田利常に召され、五百石を賜うて前田氏に復し、十九年大坂前役に從うて近江大津に至り、五千石を加賜せられ、再役にも亦加つた。六年八月二日歿、享年二十三、法號江月院、野田山に葬る。

マヘダトシナカ 前田利權 大聖寺藩主第十代。利之の二男、母は智仙院。文化九年十月廿一日江戸に生まる。幼名鐵太郎。天保二年十二月十六日從五位下駿河守に叙任し、八年二月十三日家督相續、八月廿五日從四位下に陞つた。九年閏四月六日初めて入部、九月十二日大聖寺に卒し、十月四日發喪、享年廿七。法號恭正院仁應道儀大居士、實性院に葬る。利權は稱齋と號し、齋を描いた。

マヘダトシナガ 前田利長 加賀藩主第二代。利家の嫡男。母は芳春院。永祿五年正月十二日尾張荒子に生まる。幼名大千代、後孫四郎。初諱利勝、後利長と改めた。この改名

年月は詳かでない。天正十六年七月十五日の豊翰には利勝とあり、十七年八月廿一日の豊翰には利長と書いてある。天正三年利家と共に越前府中に移り、九年八月織田信長から父の府中領を襲がしめられた。十年利長上落せんとして安土に至り、六月二日そこを發して勢多に達したが、信長横死の變報を得、直に夫人の駕を促して近江日野谷なる蒲生氏郷の館に匿き、後府中に歸らしめた。混見摘寫には、この時夫人を尾張の前田與十郎に預けたとしてゐる。十一年二月柴田勝家は羽柴秀吉と戦はん爲兵を近江に出した時、利長これが先鋒となつた。甫庵大開記に據れば、利長は關ヶ原附近に進んで放火したとあるが、これは三月十日木、本高月の放火に與つたのを誤傳したものであらう。既にして四月廿一日柴田勢敗れ、利長は利家と共に府中に背進したが、翌日秀吉との和成るに及び、また秀吉に從うて加賀に入つた。是を以て戦後秀吉は利長に石川郡松任四萬石を與へ、府中の前領を除いた。十二年九月佐々成政の末森城を襲うた時、利長は利家と共に急に赴援して成政を退却せしめ、十三年二月利家がその臣村井長頼をして越中蓮沼を攻めしめた時、利長はまた利家と國境に出て聲援に備へた。この年八月秀吉の越中を攻めるや、利長軍に從ひ、九月十一日附を以て羽柴氏を冒すことを許され、成政の舊領彌波射水・婦貞三郡に封せられて、守山城に移り鎮し、松任は秀吉の領に歸した。同年十一月廿九日從五位下肥前守に叙任、十四年六月廿二日從四位下侍從に進み、十二月利家と共に豊臣氏を冒すことを許された。十五年九州の役に、利長は二月二十日征